『週刊ポスト』2020.9.28(月)発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦

第133回 何度聴いても泣かされる台詞入り母もの歌謡

シンガーソングライターという言葉がまだ輸入されていなかった昭和40年、丸山明宏（現・美輪明宏）は自ら作詞作曲した『ヨイトマケの唄』を『木島則夫モーニングショー』で披露し、その存在を全国に印象づけます。

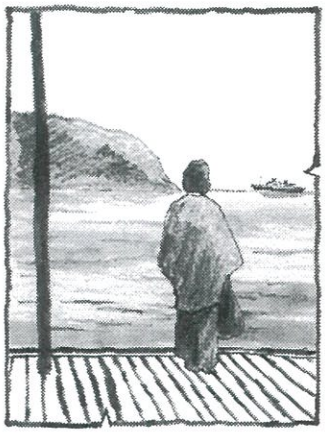
ヒットの規模は同時期の若大将ソングにとても及びませんでしたが、その後、多くの歌手にカバーされ、77歳で初出場した8年前の第63回紅白歌合戦の熱唱が感動を呼び、今では『君といつまでも』とともに昭和歌謡のスタンダードになっています。

『ヨイトマケの唄』は、美輪明宏しか表現できない「一人芝居の世界」なので、歌というより全編、「愛の叫び」のように聞こえてきます。海援隊がヒットさせた『母に捧げるバラード』（詞・武田鉄矢）は歌というより台詞劇の要素が強いのですが、『ヨイトマケ～』に影響されたオマージュソングでもあるようです。

台詞の入る歌謡曲の中で、何度聴いても泣かされるのが、「母もの」です。『岸壁の母』は昭和29年9月に菊池章子の実話歌謡として発売されましたが、そのときにはまだあの間奏の長台詞は挿入されていませんでした。

それから17年後の昭和46年、浪曲師の二葉百合子が歌謡浪曲にアレンジしてレコード化、翌年シングル盤が発売され、じわじわと感動の輪が広がり、5年後の昭和51年にブレイク、初の紅白歌合戦出場に至りました。間奏の長台詞は、菊池盤を作詞した藤田まさとではなく、浪曲作家の室町京之介です。

シベリアに抑留された息子の帰還を待つ母の心情には何度聴いても、胸が一杯になります。私の父親がシベリア帰りでもあり、すでに40年前に亡くなられた実在のモデル・端野いせさんのお住まいが私の住む大森だったこともあって、浪花節ファンの私は、毎回わかっていながら涙腺をやられてしまいます。



「母もの歌謡」に台詞は相性がいいので、『岸壁の母』以外にも、涙を誘う名台詞入りの昭和歌謡は数多くあります。

宮城まり子『ガード下の靴みがき』（詞・宮川哲夫）と山田太郎『新聞少年』（詞・八反ふじお）は病床の母親に代わって働く親思いの少年少女もの、千昌夫『味噌汁の詩』（詞・中山大三郎）では東北から都会に出てきた青年が「おふくろの味」を懐かしみます。森進一が『おふくろさん』の冒頭に台詞を入れて川内康範に叱責されましたが、観客の涙を誘おうと思いついた気持ちもわからなくはないにしても、作詞者の心を無視してはいけません。

母親代わりの「父もの歌謡」も見逃せません。赤いべべを買ってあげられないわが子に対し「ささ、いい子だ、ねんねしな」とさとす一節太郎の『浪曲子守唄』（詞・越純平）では「お乳ほしがるこの子が可愛い」と歌われていますが、昭和41年に千葉真一主演で映画化された際のやくざ映画では、乳飲み子ではなく5歳という設定になっていて、演じていたのは、当時5歳の真田広之でした。

児童虐待の悲惨なニュースが絶えない昨今、社会の劣化を嘆くとともに、気がつけば「お母さんの歌」も聞こえてこなくなりました。

ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。『私的「昭和大衆歌謡考」』第4集『しあわせになろうね』（グスコー出版）が好評発売中